

全国学力・学習状況調査結果の活用に係る研究
－身に付けた力を児童も教師も実感できる国語科単元構想の工夫－

総合支援課 小中学校班 長期研修員 藤下 恵里

1 主題設定の理由

所属校の児童にとって、国語は嫌いな（苦手な）教科の筆頭である。その理由として「読むことが面倒」、「何のために読むのか分からない」、「読んでも意味が分からない」などが挙げられる。一方、教師の指導には、単元を貫く言語活動を設定するものの、それが指導事項と結び付き、付けたい力が確実に付いているか、身に付けている力を児童にも自覚させているか、児童が目的意識を持って学ぶことができる授業づくりをしているか、という疑問が残る。

国語科においては、「実生活に生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付ける」（平成20年中教審答申国語科改善の基本方針（注1））ために、「C読むこと」の指導では、児童にとっての読む目的を明確にし、正確に理解する能力と適切に表現する能力とを一体的に育成することが求められている。この実生活において不可欠な知識・技能と、それを様々な場面で活用する力の定着を測る手立ての一つに、全国学力・学習状況調査（以下、全国調査）がある。静岡県学力向上推進協議会報告書（平成26年1月）（注2）では、同調査（小学校国語）における本県児童の状況として、「目的に応じて複数の情報を関係付けて考えをまとめることに、引き続き課題がみられる」こと、「目的や相手に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりすることについては、教員と児童の意識に差がみられる」ことが指摘されている。そこで、自己課題及び本県の実態並びに今求められている授業改善の方向性を踏まえ、本研究では、「目的に応じて読み、考えをまとめる力」を身に付けることに焦点を当てる。

さらに、小学校学習指導要領第1章総則第4の2（注3）に示された「見通す・振り返る」学習活動の重視を踏まえ、特に振り返る活動に着目する。児童にとっては、振り返る活動が、付けたい力に向かって学びが一貫したものとなるポイントと考える。教師にとっては適切な時期と方法による評価が、授業改善を推進する上で重要であると考えられる。

これらを踏まえ、付けたい力が身に付いたことを児童・教師の双方が認識できる単元（主として「C読むこと」）を構想・実践し、提案していきたい。

2 研究の目的

小学校国語科において、付けたい力が身に付いたことを児童・教師の双方が認識できるような単元（主として「C読むこと」）を構想・実践し、提案する。また、全国調査問題等を授業改善に活用する方法についても提案していく。

3 研究の方法

- (1) 学習指導要領や文献等を読み、「目的に応じて読み、考えをまとめる力」を定義する。

また、「振り返る活動」の捉えを明確にする。

- (2) 研究実践校を含むA町児童の国語の授業全般に対する意識や、研究実践校児童の「目的に応じて読み、まとめる力」について、実態を把握する。
- (3) A町小学校の国語を担当する教師に、国語の授業に対する意識調査を行い、授業づくりの現状を把握する。また、研究実践校教師の国語の授業に対する意識の変容を調査する。
- (4) 児童・教師の実態を把握した上で、身に付けた力を児童も教師も実感できる単元を構想し、実践する。この単元の中に、チア・アップシートや全国調査問題の趣旨を取り入れる。さらに、単元と一体化した評価問題を作成し、実施する。
- (5) 児童の身に付いた力や、国語の授業に対する意識の変容を検証する。

4 研究の内容

(1) 「目的に応じて読み、考えをまとめる力」の定義及び「振り返る活動」の捉え

ア 「目的に応じて読み、考えをまとめる力」の定義

小学校学習指導要領解説国語編（注4）には、目的に応じることについて、「読むことによって何を得ようとするのか、またどのように活用しようとするのかなどについて考える必要がある」とある。つまり、実生活で生きてはたらく力の育成のために、児童が単に与えられた文章を無目的に読むのではなく、目的に応じて本や文章を選び、主体的に学習に関わることが重要なのである。

さらに、「全国学力・学習状況調査の4年間の調査結果から今後の取組が期待される内容のまとめ（小学校編）」（注5）によると、「学習指導要領の示す「読むこと」の領域では、「正確に理解する能力」を育成することになるが、「適切に表現する能力」と「正確に理解する能力」とは表裏一体な関係として、連続的かつ同時的に機能するものであることについても留意する必要がある。」と述べられている。

そこで、「目的に応じて読み、考えをまとめる力」を、「児童が目的を明確にして本や文章を分析的、あるいは総括的に読み、解釈をした上で、それらに対する自分の考えを持ち、表出すること」と捉える。

イ 「振り返る活動」の捉え

学習したことを振り返る活動は、見通しを立てる活動と対になっていなくてはならない。平成25年度全国調査の学校質問紙及び児童質問紙には、「学習したことを振り返る活動」について項目が追加されている。同調査の教科に関する調査と質問紙調査のクロス集計（注6）によれば、授業で振り返る活動を積極的に行った学校ほど、教科の平均正答率やB問題（特に記述式問題）の平均正答率が高い傾向が見られることが分かった。

水戸部修治教科調査官は、振り返る活動について「一定の知識として押さえるだけでなく、改めて読み返したり、別の物語を読んで確かにそうだと実感したりできる振り返りが重要」（注7）としている。

そこで本研究においては、「振り返る活動」を、学んだことを知識として押さえることに加え、実際に読んだり書いたりする場面で活用することと捉える。

(2) 児童の実態調査

ア 児童の国語に対する意識の実態

資料1は、「国語の勉強が好きだ」と答えた児童の割合をA町と静岡県、全国とで比較したものである。資料2は、「国語の勉強は大切だ」と答えた児童の割合を同様に比較している。資料1・2の結果から、A町の児童は国語の学習をあまり好んではないが、国語を重要だと感じていると考えられる。

「国語で好きだと感じていること」の質問には、「物語文を読むことが好きだ」と答えた児童の割合に比べ、「説明文を読むことが好きだ」と答えた児童の割合が低い。このことから、児童は説明文を好んでいないと考えられる。主な理由として、「読んでも理解できない」「難しい」といった回答が自由記述に見られた。

児童自身をもっと付けたいと思っている力については、資料3に示した。

「漢字を使う力」に続いて「読んでまとめる力」、「読んで理解する力」が上位に位置する。好きではないと感じていながらも、それらの力を大切だと思っていることが分かる。

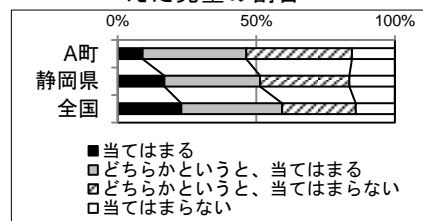
イ 「目的に応じて考えをまとめる力」の実態

実態調査として、平成24年度全国調査小学校国語B3を行った。

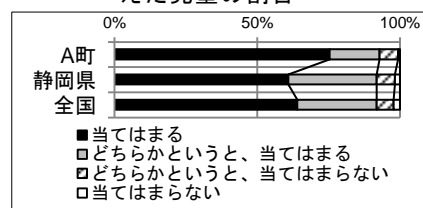
この問題は、目的に応じて雑誌を読み、編集者の意図を捉えたり、記事を結び付けたりしながら、自分の考えをまとめることができるかどうかをみるものである。編集されたメディアの一つである雑誌を読む場合、目的に応じて雑誌や記事の特徴を捉えることが重要である。

資料4は、設問1イ「記事の構成や見出しに着目できるかどうかをみる問題」の平均正答率と無

【資料1】「国語の勉強が好きだ」と答えた児童の割合

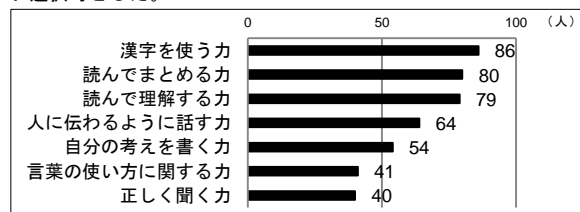


【資料2】「国語の勉強は大切だ」と答えた児童の割合



【資料3】自分自身をもっと付けたいと思っている国語の力

（「自分自身をもっと付けたいと思っている国語の力」を3つまで選択可とした。）



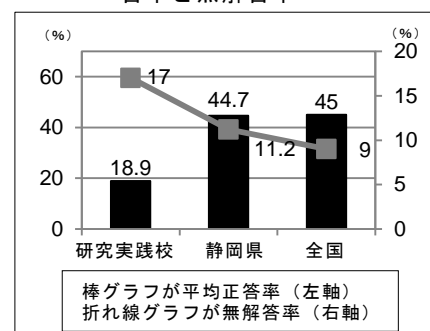
注) 資料1～3について

実施時期：平成26年5月

対象：A町の小学校第5学年児童155人

方法：資料1・2は4件法を用い、理由を自由記述とした。自由記述は、回答を典型的に集計した。平成26年度全国調査の児童質問紙と比較した。

【資料4】平成24年度全国調査小学校国語B3設問1イの平均正答率と無解答率



注) 対象：研究実践校第5学年児童53人

実施時期：平成26年5月

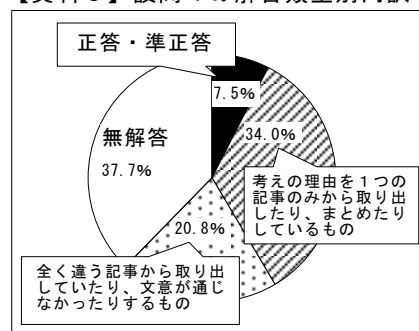
方法：平成24年度静岡県及び全国の第6学年児童と比較する。

解答率を示している。研究実践校の平均正答率は 18.9%であり、全国の平均正答率 45.0%を大幅に下回っている。大見出しに着目すべきところを、間違っ小見出しに着目している誤答が多く見られた。

次に設問4「2つの記事を結び付けながら読み、事実を基にして自分の考えを記述する問題」に着目する。本問の正答には2つの条件があり、その両方を満たす必要がある。全国の平均正答率 37.7%に対し、研究実践校の平均正答率は正答・準正答を合わせても 7.5%と大幅に落ち込んだ。

本問の解答類型別内訳を資料5で示す。字数に関する条件は満たしているものの、2つの記事を結び付けながら読み、事実を両方の記事から取り出したりまとめたりして書くという条件については、大きな課題があると考えられる。また、無解答率が高いことから、問題文の量の多さに戸惑い、問題を読むことを諦めていたり、読んではいるが、意味を全く理解することができていなかったりすることが推測できる。

【資料5】設問4の解答類型別内訳



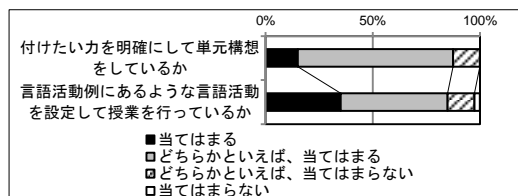
注) 対象：研究実践校第5学年児童 53人
実施時期：平成26年5月

(3) 教師の意識調査

資料6は、A町の小学校国語を担当する教師の、付けたい力を明確にした単元構想及び言語活動を設定した授業への取組状況をまとめたものである。ほとんどの教師は「当てはまる」または「どちらかといえば、当てはまる」と捉えており、自由記述でも「学習指導要領が改訂されたことにより、単元を貫く言語活動を重視するようになった」といった回答が多く見られた。

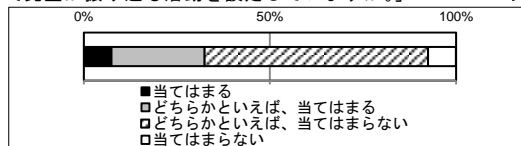
一方、児童自身が振り返る活動の設定状況を、資料7にまとめた。6割以上の教師が、児童自身が振り返る活動を行っていないことが分かった。また、振り返る活動の質について、半数以上の教師が、児童自身が自分に付いた力を認識できるような振り返る活動をしていないことが分かった(資料8)。

【資料6】教師の国語科への取組状況



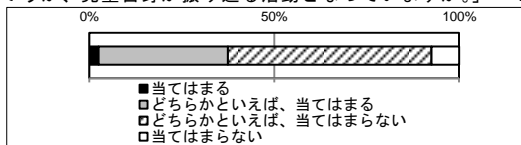
【資料7】振り返る活動の設定

「国語の毎時間の授業の最後もしくは「次」ごとに、児童が振り返る活動を設定していますか。」



【資料8】振り返る活動の質

「振り返る活動はその授業のねらいが達成されたかどうか、児童自身が振り返る活動となっていますか。」



注) 資料6～8について
対象：A町の小学校国語を担当する教師 40人
実施時期：平成26年5月
方法：4件法+自由記述による質問紙調査

(4) 「目的に応じて読み、考えをまとめる力」を付ける単元構想の工夫

児童及び教師の実態調査から、目的や意図に応じて、必要となる事実を読み取ったり、複数の情報を関係付けたりしながら、分かったことや自分の考えを書くことに課題があ

ることを確認できた。そこで、児童の興味・関心を重視しつつ、文章の種類や目的に応じて読み、読んだことを活用できるような単元を構想する必要があると考える。さらに、様々な振り返る方法を例示し、振り返る活動の効果を教師自身が実感できるようにしていく工夫が必要であると考え。

以上の考えから、「目的に応じて読み、考えをまとめる力」を付けるための単元モデルを作成した（資料9）。

この単元モデルでは、「何のために読むのか」という目的意識と自分に身に付ける力を児童が明確に持つように、第1次の扱いに留意した。第1次の第1時において、これからの学習への興味を抱かせる投げ掛けをし、第2時までの期間を1週間程度空けている。この期間を「耕し期間」とした。「耕し期間」とは、教師の投げ掛けを基に、児童が目的を明確に持ち、主体的に考え、調べたり、読んだり、話し合ったりしながら興味・関心を高める期間である。なお、この「耕し期間」には、別の小単元を実施する。

第2次からは、教師が示したモデルを参考に、言語活動を遂行するために必要な力を付けていく。この付けたい力と照らし合わせた形で、毎時間の振り返る活動を設定する。毎時間の振り返る活動では、児童が自分に付いた力を確認できるようにするとともに、教師にとっては、次時への支援・指導に結び付けられるようにする。

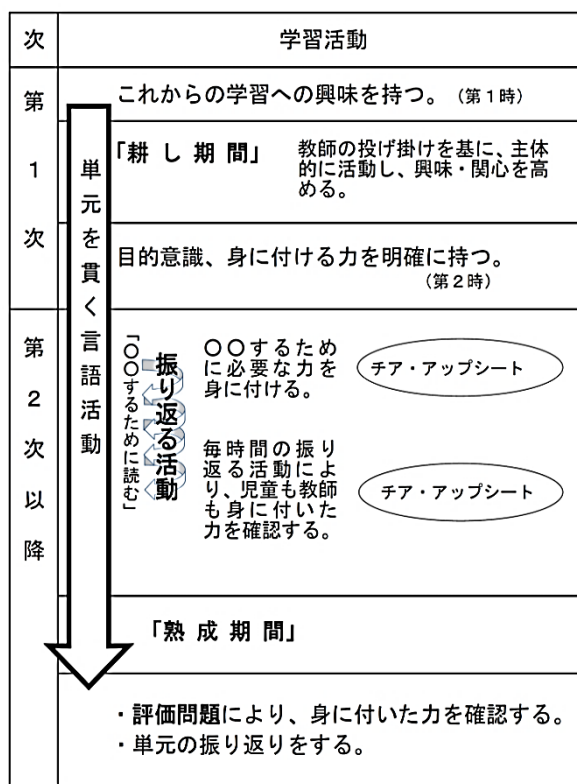
また、付けたい力の定着を図るために、全国調査の趣旨や問題を参考に作成されたチア・アップシートを、前時の復習等の場面で効果的に取り入れる。

さらに、単元の学習活動終了後、単に記憶の再生にならないように1週間程度の期間を空け（熟成期間）、評価問題を実施する。評価問題は、単元において身に付けた力を測ることができるか、児童が段階を踏まずに全て自力で解決できるかという2点に留意し、全国調査を参考に作成する。評価問題の解答類型と正答を単元に入る前に確定しておくことにより、付けたい力にぶれが生じることを防ぎ、目指すべき児童の姿を常に意識して指導を展開することができる。と考える。

(5) 授業実践Ⅰ・Ⅱの実際と特徴

資料9の単元モデルを用い、授業実践Ⅰ（以下、実践Ⅰ）は「新聞を効果的に読む」力、授業実践Ⅱ（以下、実践Ⅱ）は「図表等を効果的に使い、分かりやすく伝える」力を身に付けることを目指して実施した。

【資料9】単元モデル



【資料10】実践Ⅰ（5月～6月）の単元構想

「新聞のひみつを見つけて話し合おう ～新聞を効果的に読む～」

次（時間数）	評価規準	学習活動
第1次	(1)	・教師の紹介する新聞記事について聞いたり、新聞掲示板の使い方について知ったりし、新聞に興味を持つ。
「耕し期間」		
第2次	(1)	・新聞の構成を理解している。 〈言語についての知識・理解・技能イ(キ)〉 ・実際に新聞を見て感じたことや、知っていることを話し合う。 ・学習のめあてを理解し、「新聞のひみつ」を見つけて話し合うことへの見通しを持つ。
第2次	(3)	・新聞記事には特有の構成があることを理解している。 〈言語についての知識・理解・技能イ(キ)〉 ・見出しやリード、本文などの記事の構成に着目して読んでいる。 〈読む能力(イ)〉 ・新聞記事を比べて読み、そこに書き手の意図が表れていることを理解した上で自分の考えを持ち、考えを発表し合うことを通して考えを深めている。〈読む能力(オ)〉 ・新聞の特徴や構成、記事の書かれ方について興味を持ち、進んで話し合おうとしている。 〈国語への関心・意欲・態度〉 ・新聞記事の書き方の特徴をつかむ。 ・あすなる学習室の「あすなる新聞」を利用し、新聞の一面の構成を確認する。 ・同一の内容を取り上げた2つの記事を比べて読むことのよさを話し合う。 ・前時までの学習の定着をチャ・アップシート「新聞に親しもう1」で確認する。 ・今まで学んできた新聞の「ひみつ発見シート」をまとめて、「新聞攻略本」にする。
「熟成期間」		
第2次	(1)	・〈国語への関心・意欲・態度〉 ・〈読む能力(イ)〉 ・〈読む能力(オ)〉 ・〈言語についての知識・理解・技能イ(キ)〉 ・評価問題を解き、目的に応じて読む力を確認する。 ・単元の振り返りをする。

【資料11】実践Ⅱ（9月～10月）の単元構想

「「それいいねメッセージ（意見文）」を書いて、となりの小学校の5年生と意見を交流しよう

～図表等を効果的に使い、分かりやすく伝える～」

次（時間数）	評価規準	学習活動
第1次	(1)	・教師の投げ掛けや示されたグラフを基に、将来のA町がどうあるべきか、どうあってほしいかなどを考えようとしている。 〈国語への関心・意欲・態度〉 ・教師の投げ掛けや教師の提示したグラフを基に、将来のA町について話し合う機会を持つ。
「耕し期間」		
第2次	(1)	・説得力のある「それいいねメッセージ（意見文）」を書くための工夫を考えながら教材文を読むことを理解し、学習の見通しを持つ。 〈国語への関心・意欲・態度〉 ・「それいいねメッセージ（意見文）」を書き、隣の小学校第5学年児童とメッセージを交換して読み合う見通しを持つ。 ・より説得力のある「それいいねメッセージ（意見文）」を書くために、既習の説明文の文章構成を振り返る。 ・「天気を予想する」を読み、大まかに内容を捉える。 ・グラフの読み取り方をチャ・アップシート「グラフを読み取るう1」で確認する。
第2次	(3) 読む	・説得力のある「それいいねメッセージ（意見文）」を書くための工夫を考えながら教材文を読もうとしている。 〈国語への関心・意欲・態度〉 ・文章には様々な構成があることを理解している。 〈言語についての知識・理解・技能イ(キ)〉 ・筆者の説明の工夫（考えや根拠となる事実の表し方）に着目して読んでいる。 〈読む能力(ウ)〉 ・グラフの読み取り方をチャ・アップシート「グラフを読み取るう3・4」で確認する。 ・説得力のある「それいいねメッセージ（意見文）」の書き方を、教材文「天気を予想する」から学ぶ。
第3次	(3) 書く	・文章には様々な構成があることを理解している。 〈言語についての知識・理解・技能イ(キ)〉 ・説得力のある「それいいねメッセージ（意見文）」を書くために、構成の効果を考えて書こうとしている。 〈国語への関心・意欲・態度〉 ・説得力のある「それいいねメッセージ（意見文）」にするために、適切に図表やグラフなどを引用して、自分の考えを書いている。 〈書く能力(エ)〉 ・短い例文で、「それいいねメッセージ（意見文）」の書き方を確認する。 ・説得力のある意見文を書くために、「グラフや表を引用して書こう」を参考にし、下書きシートを作成する。 ・下書きシートを基に、「それいいねメッセージ（意見文）」を記述する。
第4次	(1)	・説得力のある「それいいねメッセージ（意見文）」になっているかを考えながら、隣の小学校の友達メッセージを読み、「それいいねカード」に記入しようとしている。 〈国語への関心・意欲・態度〉 ・隣の小学校の第5学年児童の意見文を読み、「それいいねカード」に記入する。
「熟成期間」		
第4次	(1)	・〈国語への関心・意欲・態度〉 ・〈読む能力(ウ)〉 ・〈書く能力(エ)〉 ・〈言語についての知識・理解・技能イ(キ)〉 ・評価問題を解き、目的に応じて読む力を確認する。 ・単元の振り返りをする。

ア 児童の興味・関心を培う「耕し期間」

実践Ⅰでは、「新聞のひみつを見つけて話し合おう～新聞を効果的に読む～」という単元を実施した（資料10）。「耕し期間」に新聞記事を紹介したり、気になった新聞記事を貼っていく新聞掲示板の使い方を説明したりして、新聞への興味を沸き立たせるようにした。この「耕し期間」には、担任教師の協力を得、新聞記事の紹介や児童との共同作業による新聞掲示板の貼り替えを行った。この期間の活動により、児童は単元を通して、家族と一緒に新聞を読んだり、新聞記事の内容について話し合ったりする姿が見られ、興味・関心を維持できていた。

実践Ⅱでは、「「それいいねメッセージ（意見文）」を書いて、となりの小学校の5年生と意見を交流しよう～図表等を効果的に用い、分かりやすく伝える～」という単元を実施した（資料11）。「耕し期間」には、教師の書いたモデル文やA町に関わる15種類のグラフを示した。児童は示されたグラフを基に将来のA町について考え、盛んに意見を交流していた。実際に、「それいいねメッセージ（意見文）」を書く段階になっても、何のために書くのかという目的が明確であったため、児童は興味・関心を維持できていた。

このように「耕し期間」を設定したことにより、児童がより目的を持って読むことができたといえる。

イ チア・アップシートの効果的な利用

実践Ⅰでは、新聞の構成について学んだ次の時間に、チア・アップシート「新聞に親しもう1」を復習として利用した。

実践Ⅱでは、単元の前半部分において、チア・アップシート「グラフを読み取ろう1・3・4」を用い、グラフから分かることや数値の推移を表す言葉の使い方を押さえた。このことにより、教材文に用いられたグラフを読み取り、文章と関連付けて捉えたり、自分の「それいいねメッセージ（意見文）」に適切なグラフを用いたりする力が身に付いた。

チア・アップシートは、正答をすぐに確かめられるため、今身に付けている力や自分に課題があった力を児童自身が確認することができ、効果的であった。

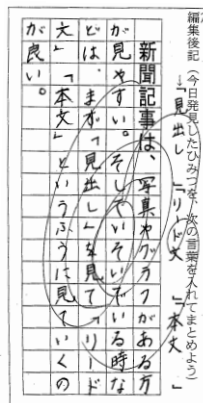
ウ 自己の学びを振り返る活動

実践Ⅰでは、分かったことを条件に合うように「新聞のひみつ」としてまとめて書く型（資料12①）と、内容について条件に合うように自分の考えを書く型（資料12②）を取り入れた。

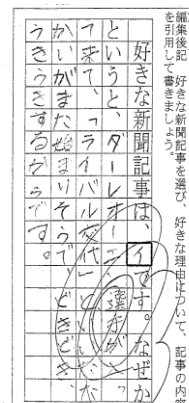
実践Ⅱでは、一連の学習が一目で分かり、自分に付いた力を把握できるよう、一枚のシートに書きまとめていくこととした。実践Ⅱにおいても、用語を使ってまとめるという条

【資料12】児童の振り返る活動

①



②



件を加えたり、条件に合わせてその日に学習した内容に対する自分の考えを書いたりする振り返る活動を積み重ねていった。

様々な型の振り返る活動を経験したことで、実践Ⅰではまとめきることができなかった児童Aさんが、実践Ⅱでは自分の力でまとめることができるようになった(資料13)。振り返る活動を積み重ねることによって、多くの児童が、Aさんのように条件に沿ってまとめる力が向上したと考えられる。

また、「熟成期間」を経て実施した単元全体を振り返る活動では、多くの児童が自分に付いたと感じている力を書いている(資料14)。実践Ⅰ・Ⅱを通して、一定の期間を空けても、自分自身に身に付いた力を自覚していることが推測できる。

エ 評価問題

実践Ⅰでは、同一の内容を取り上げた2つの新聞記事を比べながら読み、新聞や新聞記事の構成についての理解を確認したり、目的や意図に応じて自分の考えをまとめる力を確かめたりする問題を作成した。

ここでは、事前調査において課題が大きかった「目的に応じて読み、考えをまとめる力」を確かめる評価問題(問3)(資料15)を取り上げた。本問は2つの記事に書かれている内容を読み、理由となる事実を基にして自分の考えを記述する力を問う問題である。本問でいう「目的」とは、自分の立場をはっきりさせ、複数の

条件に沿ってまとめることを指す。平均正答率は32.1%であり、課題が残った。解答状況を分析した結果、引用に関する誤答が目立った。中でも、自分の考えの根拠として妥当な部分を引用していなかったり、文や文章の一節を正しくかぎ(「」)でくることができていなかったりするものが多く見られた。本問は授業において、ほぼ同様の形式を用いて学習している。授業では正答であったにもかかわらず、評価問題では誤答であった児童が多い。これは、自分の考えの理由を述べる上で、根拠とする新聞記事の内容を的確に押さえることができていなかったことに加え、引用の仕方そのものへの理解が十分ではなかったことが考えられる。

【資料13】児童Aさんの実践Ⅱの振り返る活動(抜粋)

(下線は入れるよう指定した言葉)

- ・「天気を予想する」(説明文)は、「ありの行列」(説明文)に似ていると思いました。わけは、最後に筆者の主張が書いてあるからです。
- ・資料は、主張を具体的に説明するためや、根拠を伝えるためのものだと思います。

【資料14】児童の単元全体を振り返る活動 (「どんな力が身に付きましたか。」)

- (実践Ⅰ)
- ・新聞を読む力が付いた。今まで新聞は全部読まないといけなかったと思うけど、見出し・リード文・本文の順番で読んでいけばいいことが分かった。
 - ・新聞を比べて読む力が付いたと思う。
- (実践Ⅱ)
- ・主張がどこかを考えながら読む力が付いた。
 - ・文章構成を考えて「それいいねメッセージ(意見文)」を書く力が付いた。
 - ・資料をうまく使って「それいいねメッセージ(意見文)」を書く力が付いた。

【資料15】実践Ⅰにおける評価問題 問3 (目的に応じて読み、考えをまとめる問題)

③ 新聞記事A・Bを陳ん、えりさんが意見を述べています。あなたもえりさんの意見に同意するか、反対するか。またその理由を、次の条件に合わせて書きましょう。(1人1記事から、別のえりさんの意見も書かなくても構いません。)

条件
1 新聞記事を利用して「ただし」引用するのは二十文字以内で書きましょう。
2 えりさんの意見に、まんまか反対か □ に書きましょう。
3 「なぜなら」続けて、あなたが考える理由を八十文字以上百文字以内で書きましょう。

えりさんの意見

私は、Aの記事の方が、町のどうもこのことを注意する効果が高いと思います。なぜなら「前四時半から」ともこのことを始める」ということだから。農家の人の言分が分り、苦労して生産したものをこのように「おいしい」というものができると感じてもらえるからです。

えりさんの意見に □ です。なぜなら、

100字 80字

実践Ⅱでは、目的や意図に応じて、適切な資料や文章構成について考えながら読むことができるかどうかを確かめる問題を作成した。

評価問題（設問□問2）（資料16）は、資料を適切に用いる力を確かめるものである。

「適切に用いる」とは、どの資料を、何のために、どの箇所に用いるのかを考えて用いることを指す。

この力を付けるために、第2次では教材文において重要だと考える資料を選んだり、図表やグラフ等の資料を文章と結び付けて考えたりする学習活動を取り入れた。第3次では、「それいいねメッセージ（意見文）」の下書きをする段階で、常に資料の適切な引用ができているかを確かめたり、友達と指摘し合ったりする交流活動を取り入れた。

その結果、本問の平均正答率は86.1%であった。自分の主張や展開に合わせて、資料を適切に用いる力が定着した。

評価問題（設問□問1）（資料17）は、文章構成の理解を確かめるものである。

この力を付けるために、第2次では、既習の説明文と教材文を比べることを通して、文章構成には様々な種類があることを指導した。第3次では、「それいいねメッセージ（意見文）」の下書き段階において、色付箋（主張、資料の説明、問いで色分けをする）を使用し、文章構成を意識させた。

【資料16】 実践Ⅱにおける評価問題 設問□問2
（資料を適切に用いる力を確かめる問題）

① 写真Aの環境教育の様子を説明する文章を完成させよう。
② 写真Bの環境教育の様子を説明する文章を完成させよう。
③ 写真Cの環境教育の様子を説明する文章を完成させよう。
④ 写真Dの環境教育の様子を説明する文章を完成させよう。
⑤ 写真Eの環境教育の様子を説明する文章を完成させよう。
⑥ 写真Fの環境教育の様子を説明する文章を完成させよう。
⑦ 写真Gの環境教育の様子を説明する文章を完成させよう。
⑧ 写真Hの環境教育の様子を説明する文章を完成させよう。
⑨ 写真Iの環境教育の様子を説明する文章を完成させよう。
⑩ 写真Jの環境教育の様子を説明する文章を完成させよう。

※ (用) 略

① 写真Aの環境教育の様子を説明する文章を完成させよう。
② 写真Bの環境教育の様子を説明する文章を完成させよう。
③ 写真Cの環境教育の様子を説明する文章を完成させよう。
④ 写真Dの環境教育の様子を説明する文章を完成させよう。
⑤ 写真Eの環境教育の様子を説明する文章を完成させよう。
⑥ 写真Fの環境教育の様子を説明する文章を完成させよう。
⑦ 写真Gの環境教育の様子を説明する文章を完成させよう。
⑧ 写真Hの環境教育の様子を説明する文章を完成させよう。
⑨ 写真Iの環境教育の様子を説明する文章を完成させよう。
⑩ 写真Jの環境教育の様子を説明する文章を完成させよう。

【資料17】 実践Ⅱにおける評価問題 設問□問1
（文章構成を確かめる問題）

① わたしたちの学校の環境教育には、どのような活動が行われているのだろうか。
② 環境教育には、どのような活動が行われているのだろうか。
③ 環境教育には、どのような活動が行われているのだろうか。
④ 環境教育には、どのような活動が行われているのだろうか。
⑤ 環境教育には、どのような活動が行われているのだろうか。
⑥ 環境教育には、どのような活動が行われているのだろうか。
⑦ 環境教育には、どのような活動が行われているのだろうか。
⑧ 環境教育には、どのような活動が行われているのだろうか。
⑨ 環境教育には、どのような活動が行われているのだろうか。
⑩ 環境教育には、どのような活動が行われているのだろうか。

ウ	イ	ア
カ	オ	エ

【資料18】 実践Ⅱにおける評価問題 設問□問3
（文章構成の工夫と良さを確かめる問題）

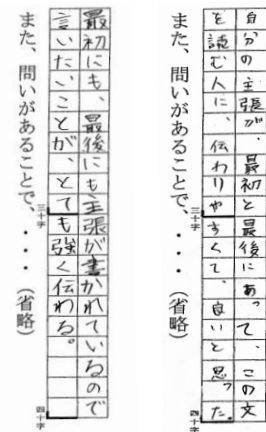
条件1 次の言葉を使って書く。
条件2 三十字以上、四十文字以内で書きましよう。

また、問いがあること、(省略)

評価問題（設問二問3）（資料18）は、文章構成の工夫とその良さを確かめる問題である。

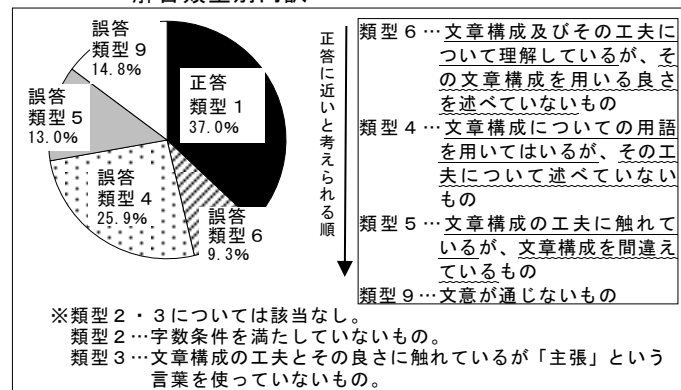
この力を付けるために、第2次では、文章構成を知識として知るだけでなく、その文章構成の型を用いる良さを話し合うことで、自分が書こうとする「それいいねメッセージ（意見文）」には、どんな文章構成の型が適切であるかを考える学習活動を設定した。このような指導により、評価問題では、児童は文章構成について、用語としての知識だけでなく、文章構成の型を用いる良さについて、自分なりの言葉でまとめることができた（資料19）。

【資料19】実践Ⅱにおける評価問題 設問三問3における児童の答え



一方、誤答の解答類型に着目すると、文章構成について用語を用いてまとめてはいるが、その工夫や良さについては述べられていないものが多い（資料20；類型6、類型4）。文章構成そのものへのつまずきのある解答も見られた（資料20；類型5）。そこで、本問で誤答と判断された児童について資料17

【資料20】実践Ⅱにおける評価問題 設問三問3における解答類型別内訳



に示した評価問題の解答状況との関連をみると、約半数が誤答であった。これは、文章構成について「主張」「問い」「答え」など片々の用語として知ってはいるものの、文章構成の型を適切な場面で、適切に用いることに課題があると推測される。

これらの評価問題を実施したことで、教師にとっては、児童がどの段階でつまずいているのかを知ることができた。また、このような児童の実態を担任教師と共有し、次の指導へとつなぐ手立てを考えることができた。

(6) 児童の変容

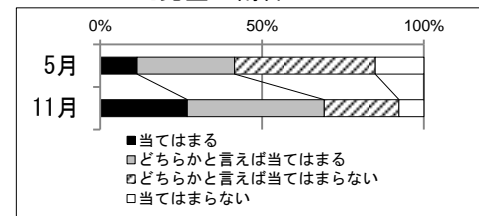
ア 国語科の授業に対する意識の変容

資料21から23は児童の国語への意識の変容であり、5月と比較して示した。

「国語の勉強は好き」と答えた児童の割合を資料21に示した。全体的に「国語の勉強が好き」という意識が高まった結果となった。

「国語の授業でめあてを意識している」と答えた児童の割合を資料22に示した。身に付けた力を意識して国語の授業に臨むようになってきていると考えられる。

【資料21】「国語の勉強は好きだ」と答えた児童の割合



注) 対象：研究実践校第5学年児童52人
 時期：2014年11月上旬
 方法：4件法

「国語の授業でめあてが達成できたかどうかを自分で意識して振り返る活動をしている」と答えた児童の割合を資料 23 に示した。授業後に身に付いた力を意識して振り返る活動をするようになっていると考えられる。

これらの調査において児童の国語への意識は大きく向上している。「(5) 授業実践Ⅰ・Ⅱの実際と特徴ア～エ」に示した内容を実施してきたことが大きな要因と捉えている。

「がんばったことや力が付いたこと、思ったこと」の自由記述(資料 24)には、自分自身に身に付いた力を客観的に捉えた記述が多く見られた。また、「読めて楽しかった」「自信になった」「読んで理解できるようになりたい」といった意欲の向上がうかがえる回答が多く見られた。

教師が学習の目的を明確に示し、付けた力を児童と共有することで、児童自身も付けた力を意識して学習に取り組んだ。この積み重ねにより、児童の意識は変容していったと考えられる。

イ 能力の変容

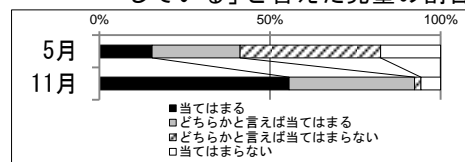
事前調査で行った平成 24 年度全国調査問題小学校国語 B 3 において比較した。

これは、目的に応じて雑誌を読み、編集者の意図を捉えたり、記事を結び付けたりしながら、自分の考えをまとめることができるかどうかをみるものである。

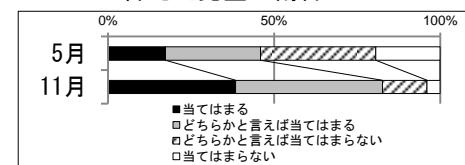
設問 1 イは、記事の構成や見出しに着目できるかどうかをみる問題である。事前調査と比べ、大きな伸びがみられた(資料 25)。

設問 4 は 2 つの記事を結び付けながら読み、事実を基にして自分の考えを記述する問題である。こちらも、大きな伸びがみられた(資料 26)。誤答について比較すると、事前調査では、

【資料 22】「国語の授業でめあてを意識している」と答えた児童の割合



【資料 23】「国語の授業でめあてが達成できたかどうかを自分で意識して振り返る活動をしている」と答えた児童の割合



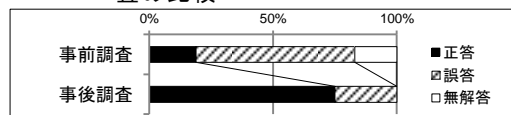
注) 資料 22・23 について
対象: 研究実践校第 5 学年児童 52 人
時期: 2014 年 11 月上旬
方法: 4 件法

【資料 24】「がんばったことや力が付いたこと、思ったこと」の児童の回答(抜粋)

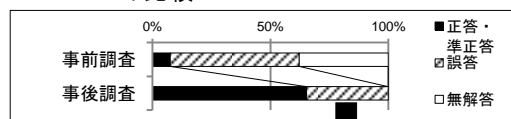
- ・今までは読むことができなかつたけど、読み方が分かってきたと思う。
- ・比べて読むことができるようになった。
- ・文章を書くのが大の苦手だけど、文章を書く力が付いたと思う。
- ・マーカーで色分けをしながら読んで、読む力が付いた。
- ・読み方を知って、読めて楽しかった。
- ・筆者の主張の位置がはっきり分かった。
- ・前より文章をまとめられるようになって、国語の力がものすごく付いたと思う。自信になった。
- ・やる事が分かってきたから、勉強がやりやすかった。
- ・難しいものもあった。文を読んで理解できるようになりたい。

注) 対象: 研究実践校第 5 学年児童 52 人
時期: 2014 年 11 月上旬
方法: 自由記述

【資料 25】設問 1 イにおける事前調査と事後調査の比較



【資料 26】設問 4 における事前調査と事後調査の比較



【資料 27】事後調査 設問 4 における誤答の内訳

- ・理由を表す述べ方になっていないが、2 つの記事を結び付けてまとめている。(7 人)
- ・選ぶべき 2 つの記事を間違えて捉え、まとめている。(3 人)
- ・1 つの記事のみから取り出している。(1 人)
- ・字数条件が満たされていない。(2 人)
- ・文意が通じない。(5 人)

注) 資料 25～27 について
対象: 研究実践校第 5 学年児童 52 人
時期: 2014 年 11 月上旬
方法: 事前調査との比較

一方の記事のみに目を向けている誤答が多くを占めていた。しかし、事後調査では、理由を表す述べ方になっていない等により正答には至らないものの、2つの記事を結び付けているものが多く見られるようになった(資料27)。

その要因を探る上で、事後調査における問題文の読み方に着目する。児童は実践I・IIを通して、目的に応じた読み方を学習した。「事実」と「意見」や「問い」と「答え」を区別して読む等の分析的に読む方法を知ったことで、事後調査では、問題文に印を付けたり、線を引いたりして、自分なりに分析しながら読んでいた。

(7) 教師の意識の変容

研究実践校教師に、実践I・IIの一部または全部を参観してもらった。また、校内研修において、国語科授業づくりに関する講義・演習を行った。資料28は、これらを通しての感想を自由記述に求めたものである。付けたい力を明確にした単元構想や振り返る活動の積み重ね等が、児童の意識や能力の向上に結び付いていることを実感した感想が多く見られた。研究実践校を含むA町教師の多くは、事前調査では、「付けたい力を明確にした単元構想をしている」と回答していた。研究実践校教師は、本単元モデルにおいて、付けたい力を明確に押さえることの意味や評価に至るまでの具体的な方法を学ぶとともに児童の意識や能力の変容を実感したことにより、これまでの指導の在り方を見直し、授業改善への意識を大きく向上させたと考えられる。

【資料28】研究実践校教師へのアンケート「授業実践参観や校内研修を通しての感想」(抜粋) 下線は筆者

- ・授業が変われば、児童の反応も変わると思った。
- ・付けたい力がはっきりしていた。どんな力を付けたいかが児童にも分かるようになっていた。
- ・授業を実際に参観することで、このような単元構想で授業を実践してみたいと思えた。
- ・付けたい力を明確にした単元構想ができていなかったことを反省した。
- ・付けたい力を押さえ、単元を構想していくことが大切だと思った。1時間単位で考えず、単元で考えないといけないと分かった。しかし、こうした単元を構想することは、自分には難しいことだと思った。
- ・今求められている内容が的確に示されていて自分たちの実践につなげていけるモデルとなった。
- ・今まで今回のような振り返る活動をしてこなかったから反省した。
- ・振り返る活動にキーワードを指定したり、条件を絞ったりする方法もあることを知った。
- ・児童が自分に付いた力を分かっていたと思う。
- ・新聞を読むことは5年生には難しいと感じていたが、単元終了後も家庭学習で自主的に新聞記事を読み、まとめてくる児が多く、興味・関心の高さがうかがえた。
- ・「それいいメッセージ(意見文)」は、児童が皆やる気になっていた。目的を持って教材文を読んだり書いたりすることが大切だと思った。ほとんどの児童は、文章構成を意識して書くことができていた。
- ・全国調査やチャ・アップシートを適切に用いて、児童の力を高めていくことのできる授業をしていきたいと思った。

注) 8月・10月の研究実践校校内研修において、国語科授業づくりに関する講義・演習を行った。

5 研究のまとめ

(1) 研究の成果

ア 効果的な単元モデルを作成し、2つの単元を実践したことで、児童の「目的に応じた読み、考えをまとめる力」を高めることができた。

(ア) 学習指導要領における押さえを明確にし、効果的な言語活動を仕掛けた単元を構想・実施することにより、児童は「何のために読むのか」という目的意識を単元の終末まで持ち続けることができた。

(イ) 振り返る活動を、意図を持って仕組み、積み重ねたことで、児童は自分自身に身に付いた力を認識することができた。教師にとっては指導を振り返ることができた。

(ウ) 単元を構想することと同時に評価問題も構想することで、付けたい力にぶれが生

じることがなく、目指すべき児童の姿を常に意識した指導を展開できた。

イ 全国調査の趣旨や問題、チア・アップシート等を単元構想の中に取り入れていくことは、授業改善の手立てとなった。

ウ 研究実践校教師の授業改善への意欲を高めることができた。

(2) 今後の研究課題

ア 国語科における他の身に付けたい力においても、本単元構想の考え方が効果的であるかを実践し、モデルとなる単元計画を示していきたい。

イ 全国調査やチア・アップシート等との関連性を明確にした年間指導計画を示していきたい。

ウ 国語科の授業改善の在り方について、どのような手立てを講じるとよいのかを探り、研究実践校等に提案していく。

注

- 1) 文部科学省 中央教育審議会、『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）』2008年。
- 2) 静岡県学力向上推進協議会、『学力向上プロジェクト事業 学力向上推進協議会報告書～静岡県の子どもの「確かな学力」育成に向けて～』2014年。
- 3) 文部科学省、『小学校学習指導要領』2008年，16 ページ。
- 4) 文部科学省、『学習指導要領解説 国語編』，東洋館出版社，2008年，62 ページ。
- 5) 国立教育政策研究所、『全国学力・学習状況調査の4年間の調査結果から今後の取組が期待される内容のまとめ～児童生徒への学習指導の改善・充実にに向けて～小学校編』，教育出版株式会社，2012年，15 ページ。
- 6) 文部科学省・国立教育政策研究所(2013)「平成 25 年度全国学力・学習状況調査クロス集計」(http://www.nier.go.jp/13chousakekkahoukoku/data/research-report/crosstab_report.pdf，2014.9.29)
- 7) 文部科学省、『初等教育資料 平成 26 年 4 月号』2014 年。
- 8) 東京学芸大学附属小金井小学校，『～明日の国語授業が変わる夏～平成 26 年度現職教員研修セミナー要項』2014 年。

参考文献

- ・『国語 五 銀河』，『国語 三 上 わかば』光村図書，2010 年。
- ・文部科学省，『初等教育資料 平成 26 年 6 月号』2014 年。
- ・文部科学省，『初等教育資料 平成 26 年 9 月号』2014 年。
- ・文部科学省『平成 25 年度全国学力・学習状況調査 小学校第 6 学年 国語 B』，2013 年。
- ・国立教育政策研究所 教育課程研究センター，『平成 26 年度全国学力・学習状況調査報告書 小学校国語』，2014 年。
- ・同 (2014)「都道府県別 静岡県」，
(http://www.nier.go.jp/14chousakekkahoukoku/factsheet/prefecture/22_shizuoka/index.html，2014.10.2)
- ・国立教育政策研究所 教育課程研究センター，『平成 24 年度全国学力・学習状況調査報告書 小学校国語』，2012 年。
- ・国立教育政策研究所 教育課程研究センター(2012)「平成 24 年度全国学力・学習状況調査報告書 小学校国語 都道府県別静岡県」，
(http://www.nier.go.jp/12chousakekkahoukoku/07todoufuku_shuukeikka.htm，2014.9.29)
- ・静岡県総合教育センター，『静岡県の授業づくり指針 国語』，2012 年。
- ・静岡県総合教育センター(2014)「あすなる学習室」 「チア・アップシート」，
(<http://www.center.shizuoka-c.ed.jp/>，2014.9.29)